
君と僕の物語

Yu-Zo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕の物語

【Nコード】

N7492A

【作者名】

Y u - Z o -

【あらすじ】

死にゆく人の声が聞こえてしまう僕と、彼女の物語。

〜1〜

「自分が生まれた日がいつかなんて憶えている人は誰もいない」

昔読んだ本の中に、そんな言葉が描かれている一節があつた。その本の題名は、確か「何とかの何とか」だった、ぐらゐに記憶の奥底に埋もれているぐらいだから、その内容なんてことになるのもはや、簡単なあらずじを説明することすら不可能だ。

それでも、その一節だけは記憶の奥底に埋もれることなく、今尚思い返すことができる。きっと、そのころの僕は、読んだ本の内容などより、そのただの一節に含まれた言葉に感銘を受けたか、そこまではいかににしても、共感をしたのだと思う。もしかしたら、内容を憶えていないのは、その一節に満足して、その先を読むことを止めてしまったからかもしれない。僕という人間性を考慮すれば、それは十分考えられることだ。

そのときの僕はきつと、無意識にその一節を忘れてしまわないうちに、記憶の引き出しに、そつと保管しておいたんだ。

その言葉を、いつか信頼した人に伝えてあげるために。

この世界から、伝えるべき人がいなくなるなんて夢にも思わずに。

僕はただ、大切にそれを記憶の引き出しに、しまつたんだ。

護^{まも}という名前は、母さんがつけてくれた名前らしい。姉さんの時も母さんが優^{ゆう}と名づけたものだから、今度は自分と父さんも自分の名前を一文字取つた名前の候補を五つも考えていたらしいけど、結局は母さんに押し切られ、僕の名前は「護」となつた。

その頃から、僕たちの世界は母さんを中心に回っていた。その頃十歳だった僕も、十四歳だった姉さんも、今より少しだけ顔にできたしわの数が少なかった父さんも、母さんのいない世界なんて考えられなかったし、考えてみたこともなかった。

いつも家において、食事の支度も風呂の準備も、掃除も洗濯も、買い物も、ごみの分別まで、生活のほとんどは母さんが仕切っていた。「ただいまー」と学校から帰ってきて、一番に返ってくるのは「おかえりー」と台所から響いてくる母さんの声だった。僕だけじゃない、それは姉さんも、父さんだって同じで、つまりところ僕たちの世界はいつだって母さんを中心に回っていた。

その僕たちの世界から、すっぱりと母さんがなくなったのは、僕がまだ十歳の頃だった。

それは何の前触れもなく唐突に現れて、僕たちの中心を奪っていった。

夕日の深いオレンジ色に目を向けて、僕はその傍らに立つ人影のシルエットをじっと見つめた。目を細めてみると、そのシルエットがいつも見ているものと違うことに気づいた。

なんだろう？

そう思いながらそのシルエットをにらんでいると、確かにそのシルエットはいつもの母さんの明るい声とは違って、不機嫌そうな沈んだ声で僕の名前を呼んだ。

「護」

僕は、細めていた目をさらに細めて、そのシルエットの輪郭を確かめた。公園の中に入ってきたそのシルエットは、すぐに夕日のオレンジに馴染んで、見慣れた姉さんの姿を映し出した。

「お姉ちゃん」

「ご飯できたって。帰るよ」

「うん」

僕は、まだサッカーを続けている賢治とタケシ君と健太に「バイバイ」と声をかけてから、姉の後ろについて公園の入り口を通り抜けた。

アスファルトは、いつもと同じように夕日のオレンジ色に照らされていた。少し生暖かな風が、汗の染み付いたシャツの上をやさしく撫でて、僕の体を通り抜けていく。

いつもなら、学校から帰ってから公園で遊んでいる僕を呼びにくるのは、母さんだ。姉さんが今まで僕のことを呼びにきたことは、一度か二度ぐらいしかなかった。

「ねえ」

僕は夕日に向かって歩く姉の背中に、なんともなしに声をかけた。「お母さんは？」

すぐに返事は返ってこなかった。返事の返ってくるまでの間、僕

は少し前を歩く姉さんの背中をずっと見つめながら、姉さんは、後ろを振り返らずに、ただただ前を見て黙って歩いていった。

やがて、姉さんは僕の少し前を歩きながら、独り言のように声を出した。

「母さん、入院することになったって」

「入院？」

「うん。検査入院らしいから、今日は家には帰れないって」

検査入院。

僕は言葉の意味もよく分からずに、姉さんの言葉を呟いてみた。最近母さんが体調を崩していたことは知っていたし、入院の言葉の意味も知っていた。でも、僕がそれをよくない出来事だと理解できたのは、入院という言葉よりも、母さんが家には帰れないという事実のせいだった。

「お母さん、大丈夫なの？」

「当たり前でしょ」

姉さんは、やっぱり振り返らずに、それでも今度は僕の声にすぐに不機嫌そうな返事を返した。

長い坂道を、僕と姉さんはそれから一言も言葉を交わさずに、歩いた。

いつもなら、母さんが僕のすぐ横を歩いているはずで、今日あった学校の出来事を僕に聞いてきているはずだった。今日はテストの返ってくる日だから、そのことで僕を脅かしていただろうし、珍しく返ってきたテストの点数がよかった僕は、いつもと違って胸を張って「まあ、楽しみにしててよ」なんて言っていただろう。そして「あら、強気なこと。珍しい」なんて言って、僕の肩をぐりぐりとグーで押し付けながら、母さんは悪戯っぽい笑顔を僕に向けていたはずだ。

そのいつもを考えながら、僕は黙っていつもと同じ帰り道を帰った。

いつも母さんとしやべりながら帰っていたときはすぐに家に着い

ていたのに、そのときは家までの道のりを妙に長く感じていた。

夏休みが明けて新学期に入った初日、美冴は転入生として僕のクラスの教室に入ってきた。担任の野沢先生の後について教室に入ってきた美冴は、控えめに教室の中を確かめてから、僕と目が合うと、何か安心したように緊張した顔にかすかな笑みを浮かべた。つられて、僕もあいまいに微笑んで見せる。すると、野沢先生はざわついたクラスメイト全員に「えー静かに」と言ってから、おもむろに僕たちに背を向けた。

本多美冴。

美冴の名前が、野沢先生の手によって黒板の真ん中に書かれた。それから、ざわついていて教室はまるで示し合わせたかのようにシンと静まり返った。

「今日から、このクラスの仲間になる本多美冴さんだ。みんな、仲良くするんだぞ」

まるで、小学生を相手にしているような野沢先生の言葉を、高校生として初めての夏休みを終えたばかりの僕たちは、みんな黙って聞いていた。そして、野沢先生に促された美冴も、うつむいていた顔を上げると小学生のような自己紹介の台詞を口にした。

「本多美冴です。よろしくお願いします」

美冴がぺこりと頭を下げると、どこからともなく、手を叩く音が響いてきた。まばらに響くその音は、やがてじょじょに増えていつて、拍手となった。

その拍手の中で、美冴は照れ笑いを顔に浮かべながら、もう一度僕のほうを見てきた。僕は拍手に加わりながら、妙に照れくさくなつて、照れ笑いを返した。

高校生にもなつて、恥ずかしくて女子と話なんてできません、なんて言うつもりはないけど、さすがに女子の集団の中に割り込んで話に入っていく勇気を僕は持ち合わせていなかった。

自己紹介が終わって、一時間目の授業が終わると同時に、さっそく美冴はクラスの女子数人に囲まれることとなった。美冴を囲んだ数人の女子は、みんながみんなクラスの中である程度ポジションを獲得している連中だった。その中にはクラスの学級委員もいれば、体育委員や保健委員、中には何の委員にも入っていない女子もいる。でも、クラスの決め事のほとんどは、この数人の女子によって決められていたし、実質、クラスの主導権を握っているのも、今、美冴を囲んでいる連中だった。

「やっぱ、こうなったな」

廊下側の一番前の席から、美冴を取り囲む集団をわざと遠回りするようにして、窓際一番後ろの僕の席まで歩いてきた健太は、僕の席の後ろの窓に背中を預けて、僕に顔を向けて声を出した。ちなみに、美冴の席は廊下側から二列目の、前から五番目の席だ。

「ああいうの、抜け目ないっていうんかな」

苦笑して言う健太に、僕も苦笑を返して、美冴を取り囲む集団に目を向けた。

「抜け目ないっていうか、如不在っていうんじゃないの、あれ」

「如在って、どういう意味？」

「なんて言うのかな。ておちとか、てぬかりとか」

「ははっ。言われてみれば、そっちの方があいづらっぱいな」

「だろ？」

僕と健太は、目を見合わせてから吹き出した。

健太は、小、中、高を通して、もう十年以上の付き合いになる僕

の親友だ。他にも、小学校の頃からの知り合いは数人この高校にいるにはいるけど、十年以上の時間を通して、お互いの距離を縮め続けられた相手は、今僕の横で笑っている健太しかない。お互い、趣味も性格も、類似点はまったくといっていいほどないのに、よくもこれだけ長い間親友としてやってこれたものだと思える。健太よりも、ずっと僕と類似した性格の持ち主や、趣味の持ち主の友達には他にもいたのに、彼らとはすでに、小学校を卒業した時点で疎遠になってしまった。こういうものは、趣味や性格が合うかどうかより、縁があるかどうかなのかもしれない。

「なあ、護」

しばらくお互い無言できやあきやあはしゃいでいる集団に目を向けていると、不意に健太が声を出した。

「お前、本多がこつちに帰ってきたこと、知つとったん？」

「え、なんで？」

「いや、なんとなく。なんか、本多お前のほう見て、笑つとったから」

ということは、僕が美冴に笑みを返したところも、健太は見ていたのだろうか。

「まあ、知つてたつていえば、知つてたけど」

「ふうん。そうか」

僕は健太に目を向けずに返事を返した。多分、健太も僕に目を向けることはしなかっただろう。

あの頃美冴に抱いていた気持ちを、健太は今なお大事に心の奥底にしまい続けているのだろうか。そう思うと、なんだか健太に悪いことをしたみたいで、僕は休憩が終わるまで健太の顔を見ることができなかった。

休憩が終わると、美冴の周りにたむろしていた連中は、つまらなそうに自分たちの席に戻っていった。健太も無言で自分の席に戻っていく。その途中で、何気なしに僕に向けたのであるう美冴の視線と目が合つて、僕は意識的に美冴から目を逸らした。

逸らした視線の先では、ちょうど健太が自分の席に座っているところだった。

「俺、本多のこと好きなんだよな」

「え、そうなの？」

「へへ、誰にも言うなよ？」

そう言っ僕に照れ笑いを向けた後、健太はもう一度視線を横へ滑らせた。健太の視線の先には、サッカーをしている賢治とタケシ君と大谷君、それに江本さんと、川田さんと山川さんと篠田さんと美冴がいる。そして、僕は健太の横顔を見ながら、きつと今、健太の目には美冴しか映ってないんだな、と思った。なんていうか、言葉ではうまく表せない表情を健太はしていた。同い年の僕から見れば、大人びた、大人から見れば、子供じみた、そんな穏やかで、濁りひとつない表情。

僕は健太に習って、サッカーをしている八人の中から、美冴だけを視界の中に留めてみた。健太にできるなら、もしかしたら僕にも、でも、健太のような穏やかな表情は多分僕にはできていない。半分驚いた、半分戸惑った、そんなちぐはぐで情けない表情をしていると思う。見なくなつて、それぐらい分かる。そして、だから僕はすぐに美冴から目を逸らした。

健太のほうへ視線を滑らせたのは、ただの偶然だろうか。そんなこと、健太と目が合ったせいで考える余裕なんてなかったけど、健太と目が合った瞬間、胸の中で僕の心臓がドキリと高鳴ったことは、確かだった。

もしかしたら、健太も僕と同じように美冴だけを映した僕の横顔を見ていたのだろうか。

僕は健太にどう声をかけていいか分からず、ただ健太の目を見つめ返した。そして、健太も僕と同じように、僕に声をかけずにしばらく僕の目をただ見つめていた。

健太は僕を試したのだろうか。

僕が、健太の言葉のすぐ後に美冴に目を向けるか。どんな顔をして、美冴を見るのか。

「大丈夫だよ」

それだって、どうしていいか分からずに出た言葉だった。でも、僕にはそうして逃げることしかできなかった。

「誰にも、言わないからさ」

そして、僕は下手くそな笑顔を作った。

「そっか」

抑揚のない健太の声が返ってくる。それからすぐに、一試合終えた美冴たちが僕たちの座るベンチの元へ集まってきた。

「あー疲れた」

「やっぱ、男子と女子別々に分けたら試合になんないよ」

「なに言ってるんだよ。ちゃんとハンデやってるじゃん」

「そうだよ。こっちはわざわざ一番うまい健太抜かしてやってるのによ」

「あと、藤堂君もね」

賢治とタケシ君が女子の苦情に反論した後に、美冴はそう付け足して控えめに笑った。

「そうだよ。こっちは三人でやってんだぜ？」

「なによー。ハンデくれるなら、藤堂君そっちのチームに入れてよね」

そう言われても仕方ないほど下手くそなので、もちろん僕は反論しない。

「おいおい、聞いたかよ、護。なんか言ってるやれよ」

健太はそう言うのとベンチから腰を上げた。

「いや、僕がサッカー下手なのは事実だから」

「っていつか、藤堂君ってサッカーだけじゃなくて全体的にだめじゃん。スポーツ系」

「アホ。護だって本気だせばお前らよりうまいっての」

「ってか、本気出さなきゃ私たち女子に勝てない時点でだめだめじ

やん」

そこまで言うか。

「お前らなあ」

健太がそう言つて、川田さんと山川さんに詰め寄ろうとしたとき、美冴が三人の間に割つて入つて「はいはい、ケンカはそこまで」と涼しい顔をしてパンパンと手を叩いた。

「次は公平に男女混合でやればいいでしょ？」

「あ、僕はいいよ」

美冴の言葉を聞いて、すかさず棄権を宣誓する。もともと人数あわせのためにここにいるのだから、わざわざ僕がサッカーまでしてやる義務はない。

「えー、だったら人数合わなくなるじゃん」

「そうだよ。それに藤堂君、さつきから一度も参加してないし」

「ずるしないでよー」

お前らに、女子にも劣る運動能力しか兼ね備えていない哀れな僕の気持ちが分かってたまるか、と心の中で毒づきながら、苦笑いを浮かべる。すると「じゃあ、私抜けるよ。それなら人数合うしいでしょ？」と美冴が助けに入ってくれた。

「えー、いいの美冴」

「うん。私疲れたから、パス」

「んじゃ、グッパしてチームわけしようぜ」

ようやく話がまとまり、試合が開始される。僕は、チームわけで散々不満を漏らしながらも、いざ試合になると楽しそうにはしゃぐ女子たちの姿を見て、思わず苦笑した。

「理恵たちも素直じゃないよね」

僕の苦笑に應えるように、美冴はそう言つて、ふふ、と笑った。

「ほんと、好きな人と一緒のチームでやりたいくせに」

笑いかけてくる美冴と目が合つて、僕は思わずすぐに目を逸らしてしまった。健太の言葉が、まるでトゲのように僕の胸に張り付いてはなれない。そのせいで、美冴のことをうまく見ることができな

かった。でも、美冴はそんな僕の反応を、別のことに関連付けたみたいだった。

「ねえ、藤堂君」

僕は、うつむき加減のまま、目だけを美冴に向けた。

「やっぱり、心配だよな」

「え？」

「おばさん、入院してるんでしょ？」

美冴の言葉に、僕は答えに困って美冴を見つめ返した。

僕からは母さんが入院したことは誰にも伝えてはいないので、おそらく、美冴はそのことを姉さんから聞いたのかもしれない。美冴がうちに遊びに来ることはしょっちゅうあったし、家に母さんの姿がないことに気づいたとしても不思議ではないし、美冴と仲のいい姉さんが美冴の性格を考慮した上で、そのことを美冴に打ち明けていたとしても、不思議ではない。

「別に、無理してみんなに付き合うことなんてないよ」

美冴は一度僕から視線を外すと、もう一度そつと僕に目を向けて声を出した。

「別に、そういうわけじゃないよ」

「そう？」

「うん。それに、家にいるより気が紛れるしね」

「藤堂君」

美冴はきゅつと目を細めて、僕を見つめた。誰かを思いやるとき、美冴は必ずその誰かにそんな目を向ける。悲しみと寂しさの同居したような、そんな優しい目を。小さい頃から、僕はよく知っている。「大丈夫だよ。僕も、お母さんも」
「そうだね」

目を細めたまま僕に微笑みかけて、美冴はそつと僕から目を逸らした。

大丈夫だよな。

不安そうに小さく呟いた美冴の声は、かすかに僕の耳に届いていた。

美冴も、僕と同じぐらい母さんのことを心配してくれていた。そして、僕のことも。

美冴のその想いが、ただの幼馴染に対してのものだとしても、それは十歳の女の子の偽りのない心情を映し出したものだった。

美冴の想いを、僕は美冴の横顔を見つめながら、見つめた。

それはすごく繊細で、とても優しいものだった。

あれから一週間が経って、美冴もずいぶんクラスの雰囲気慣れしてきたみたいだった。初めのうちは自分からクラスメイトに話しかけることができないようで、休憩時間を一人で過ごすことが多かったけど、今では休憩時間になると美冴の周りには二、三のクラスメイトが寄ってくるようになっていた。笑えるのは、転入初日に美冴を取り囲んで質問攻めにしていた連中が、今では一人も美冴に興味を示さなくなっていることだ。僕も健太も、絶対あいつら三日も持たないよな、と話し合っていたが、実際に三日目から連中が一人として美冴に近づかなくなったときは、おかしくて笑いをこらえるのが大変だった。

どうやら、美冴はクラスを仕切る連中のおめがねにはかなわなかったらしい。もともと、そのおかげで美冴の人間性はある程度保証されたようなものだった。

「図々しい」

「限らない自己中」

「救えないバカ」

この三つの条件が満たされて初めて、クラスを仕切る権利が与えられることとなることは、僕たちのクラスでは暗黙のルールとして広がっていた。もちろん、当人たちがそのルールを知る由はなく、美冴だってこの先自ずとそれを知ることになるだろう。要は、見ていれば分かる、ということだ。そのとき、美冴は「あの時、友達にならなくてよかったあ」とホッとするだろうか。少なくとも僕の知っている美冴なら、冗談交じりにそう言うだろうけど、今の美冴がどうなのかは正直、分からない。

僕は、未だに美冴との距離をうまく測れないでいた。

美冴が転入してきた日から、僕は一度も美冴と言葉を交わしていなかった。

別に、僕から美冴を避けてるわけじゃなくて、美冴から僕を避けてるわけでもない。その証拠に、僕は美冴と目が合うと一瞬目のやりどころに困りながらも笑いかけるし、美冴も戸惑いがちに笑みを返してくれる。

それでも、未だに僕と美冴は言葉を交わしていなかった。

約四年のブランク。

人と人との関係にブランクというものが存在するのかどうかは分からない。でも、数年ぶりに会った人間に僕が「やあ、久しぶり！元気してた？」なんて気軽に声をかけられないことは事実だった。その相手が異性であるなら尚更で、思春期の時期を挟んでいるなら尚更だ。もっとも、四年前に美冴がこの土地から引越していつから、僕たちは三年ほど手紙のやり取りを交わしていた。だから、実質ブランクがあるといえば一年程ということになる。ただ、その手紙のやり取りが、根本的な言葉を交わせない原因とも言えた。

一年前、突然美冴から手紙の返事が来なくなったのだ。それから、途切れた手紙のやり取りは、時間とともに忘れ去られて、まるで初めからそんなことなかったみたいに風化していった。

一度、僕から時間を置いて手紙を出してみたこともあったけど、やはり、美冴から返事が返ってくることはなく、それから僕からも手紙を出すことはしなくなった（何度もしつこく手紙を送りつける図々しさも、なぜ手紙をくれないのかと問いただす度胸も僕にはなかった）。

そして、二週間ほど前に唐突に僕宛に手紙が送られてきた。

差出人の書かれていない、無地の封筒に、便箋。そこには、事務的で、簡潔な文字が行だけ綴られていた。

（近いうちに、そっちに帰ることになりました）

そして、行を開けて、一番下に控えめに美冴の名前が記されていた。

検査入院といいながらも、それから母さんが家に帰ってくることはなかった。二日や三日ならともかく、一週間や二週間ともなるとさすがに「大丈夫だよ」という家族の声も、僕には何の説得力もない飾り文句にしか聞こえなかった。でも、入院している母さんは確かに元気そうで、母さんからの「大丈夫だよ」の言葉には確かな説得力があった。

例えば、洗面台に残された赤い歯ブラシだとか、控えめな桜の花びらのあしらわれた茶碗だとか、化粧台の上に置かれたままの化粧品だとか、家の中にはまるで時間に置き去りにされて、過去に取り残されてしまったものがたくさんある。

だから、僕は毎日のように病院を訪れては母さんの病室で時間を潰した。母さんの時間が僕たちと同じところで動いていることを確かめるために。それを、すぐそばで感じるために。小さな不安の気泡を、漏れ出してきた瞬間に握りつぶしてしまえるように。

僕は気づいていなかったんだ。

そうしている間にも、少しずつ使われなくなったものは埃をかぶっていることに。それがだんだん積み重なって、やがてそれはすべてを飲み込んでいくというのに。

「大丈夫」と言う母さんの笑顔だけに、僕は目を向けていた。

週に二度、母さんに本を届けることは僕の仕事になっていた。母さんの三十五年の人生の中に、小説を読むという選択肢は今まで片手で数えるほどしかなかったと言うくらい、母さんは本を読まない人間だった。だから、入院してから、母さんが本を読むようになってからは、僕だけではなく、父さんも姉も一様に驚いていた。

「本を読んだときは、何も考えずにいられるから、ちょうどいい

のよね
「

母さんは、そう言って照れくさそうに笑う。

なんにしても、少しでも母さんが満足できるのなら、僕にはそれでよかった。

僕はメルシーを連れて、公園の中を歩いていた。

モコモコな真っ白な毛に覆われた、ビション・フリッセ。名前はメルシーというらしい。僕の住むコーポの大家さんがペットの託児所をしていて、学校から帰ってから僕が預けられたペットを散歩に連れて行くことは、毎日の日課になっているのだ。

どうやら、メルシーは飼い主の躰が行き届いているらしく、リードを持っていなくても一匹で大丈夫なんじゃないかと思うほど、大人しく一定の速度を保ちながら、遊歩道を歩いていた。ただ、難点はその見た目だ。四肢の毛を等間隔に切りそろえられたモコモコの体は、生き物というよりはよくできた人形にしか見えない。さらにオカッパ頭のように切りそろえられた毛と、毛の奥からのぞく二つのつぶらな瞳に、鼻から口を覆う整えられた毛は立派に蓄えられた口ひげのようで、その顔は、下手な漫画に出てくるような仙人を連想させる。つまり、これだけ目立つ犬はそうそういないと言うわけで、すれ違う人は、老若男女問わずみんな振り返ってメルシーに物珍しげな視線を向けていた。

「こうしてお前連れてると、やっぱり僕がお前の飼い主に見えるのかな」

僕は知らぬ顔をして歩くメルシーに、そつと話しかけた。もちろん、周りに人がいないことを確かめて。

「別にお前の飼い主と思われるのが嫌ってわけじゃないぞ」

優しくフォローしながらも、本人は無反応だった。当然と言えば、当然か。なんせ、僕たちはつい三十分前に大家さん仲介のもと知り合ったばかりの他人同士（メルシーは犬だけだ）なのだ。だが、一声鳴くぐらい、愛想を振りまいてもいいんじゃないか？

「かわいくない奴だな、お前」

やはりメルシーは無反応で、僕も黙ってメルシーについて歩くこ

とにした。

唐突に、僕の中に声が流れ込んできたのは、その時だった。

（ごめんなさい……）

それは、水面に零れ落ちた一滴の水滴が引き起こす波紋のように、静かに、ひどく控えめに僕の中に響いて、消えていった。僕は、消えていったその声の行方を探し当てるために、立ち止まってからそっと目を閉じた。

（ごめんなさい……）

静寂に包まれた暗闇の中に、静かに静かに、その声が響く。

（ごめんなさい……ごめんなさい……ごめん……ごめんね……）

静かな波紋が、小波のように押し寄せて、大きな感情の渦に飲み込まれていく。ひどく悲しげで、ひどく寂しげで、ひどくかわいそうで。その声は、言葉にならない感情を抱え込んで、泣いているみたいだった。

目を開けると、メルシーが「どうしたんだよ」とでも言いたげに、僕のほうを見ていた。僕は「なんでもないよ」と言ってから、消えた声の名残に触れるために、もう一度目を閉じた。

不満げな犬の鳴き声が、すぐそばから響いてきた。

それから、公園を散歩するたびにその声は僕の中に響いてくるようになった。

日に日に、強く。日に日に明瞭に。

それが必然なのか、偶然なのかは分からない。分かっているのは、その声が僕と美冴をそこで引き合わせたということだけだ。

それは意味のあることなのだろうか。

その声が聞こえさえしなければ、僕と美冴がそこで出会うことはなかった。もし、そうなっていたなら、僕と美冴の人生はどんな風に変っていただろう。もし人生を自由に選べるとしたなら。

季節の変わり目に吹く風が、僕を通り過ぎていった。その風が運んだものは、季節の移ろう狭間にだけ顔を出すはかない予感と、悲しげにこだまする美冴の声だった。

僕の中に響いてくる声を辿ってついたそこに美冴はいた。

そこはひどく懐かしい場所だった。

昔、よく学校帰りに健太たちとサッカーをした公園。母さんが、いつも僕を呼びに来てくれていた広場。いつか、美冴が僕に優しい目を向けてくれた場所。

懐かしさに溺れそうになったのは、多分、そこに美冴がいたからだ。そこにいるのは、十歳のまだあどけなさの抜けきらない少女ではなかったけど、広場で遊んでいる子供たちの中にあの頃の僕はいなかったけど、ここには今の美冴がいて、今の僕がいる。

今は過去に投影されて、過去は形のない思い出へと移り変わっていく。その片鱗に僕は確かに触れていて、美冴はその媒体になっていた。

不思議な感覚だった。

こみ上げてくる感情。

想いすべてが、僕の意味とシンクロして、広がっていく。まるで、今初めて美冴と四年ぶりの再会を果たしたような、そんな気さえしてくる。

僕は広場の入り口に立って、ベンチに座っている美冴をただ見つめた。美冴もずいぶん前から僕に気づいて、視線を僕に留めていた。僕と美冴を挟んで、小学校低学年ぐらいの子供たちが、夢中でサッカーボールを追いかけている。僕たちの間には子供たちが夢中になつて遊べるぐらいの距離があった。目算で、多分二十メートル弱。換算できる、つかみ所のある距離。

すぐにも美冴の下に駆け寄って行きたい衝動と、ここからすぐにも逃げ出してしまう衝動が、僕の中で綱を引いている。優劣はどちらにもなくて、勝負の行方は分からない。

(ごめんなさい……)

美冴は、ずっと僕に視線を留めたまま、誰かに謝り続けていた。きっかけが必要だった。

僕にも美冴にも。

途切れていた僕たちの時間が、再び動き始めたというシグナル。そうすれば、僕たちはリレーのランナーのようにスタートの合図と同時に一步を踏み出せる。きつと。

そのとき、僕の傍らで不満げな犬の鳴き声が響いた。

僕は驚いて、掴んでいたリードを手放した。

自由になったメルシーがとことと広場の真ん中を通って、美冴のもとへ歩いていく。

子供たちは動きを止めてメルシーを見守っていた。

美冴の声が、僕の中から静かに消えていく。

僕は、最初の一步を踏み出した。

メルシーは美冴の足元までたどり着くと、なにをするでもなくじつと美冴を見上げていた。それから、自分のほうへ近づいてくる僕を見やってから、もう一度美冴を見上げる。

美冴はメルシーをそっと抱えあげてから、ベンチから立ち上がった。僕は、メルシーの通った跡を辿りながら、美冴の前まで来ると、足を止めた。

美冴の腕の中で、メルシーは綿飴のようなふわふわした丸い尻尾

をかすかに揺らして、くつろいでいた。そんなメルシーを見て、僕は苦笑するしかなかった。そして、美冴に目を向けると、美冴もおかしように口元をほころばせていた。

「その」

僕はそう言つて、口ごもりながら「こんにちは、本多さん」と声を発した。美冴も、穏やかな顔で、僕に声を返してくれた。

「こんにちは、藤堂君」

それだけ言葉を交わしただけで、僕と美冴の距離がぐつと縮まったような気がした。いや、縮まったと言うよりは、失っていた遠近感が、ふつと戻ってきたようなそんな感じかもしれない。

「この犬、藤堂君の？」

しばらく黙り込んだ後、沈黙を破ったのは美冴だった。

「いや、僕の犬じゃないんだ。大家さんが、ペットの託児所をやつてて、そいつは、そこに預けられた犬なんだ」

「そうなんだ」

「うん。今日で四日目。飼い主は旅行で、置いてきぼりなんだ」

「そう。かわいそうだね」

「でも、喜んでるみたいだよ」

僕はそう言つて、メルシーに目をやった。

「普段は無愛想な奴なんだ。決して大人しく人に抱っこされるような奴じゃないのに」

美冴は曖昧に微笑んでから、そつと僕にメルシーを返した。僕の腕の中で、メルシーは急に不機嫌になって暴れだした。

ほらね、と笑いかけると、美冴はくすつと笑った。それから、メルシーは僕の腕の中からさつさと脱出して地面に降り立った。

「それとも、僕にだけ懐かないのかもしれない」

「そんなことないと思うけど」

「そうかな」

「うん」

それから、僕たちは口に出すべきことを見失つて、再び黙り込ん

だ。結局、その沈黙が導く先は、一つでしかなかった。今の僕たちが共有しているものは、現在でも未来でもなくて、過去しかないのだから。

「久しぶりだね」

僕はそう言っつて美冴に笑いかけた。

僕の言葉に、美冴がかすかに肩を震わせた。静まっていた声が、また僕の中に流れ込んでくる。

（ごめんなさい……）

美冴は、唇を震わせながら、くぐもった声で「ごめんなさい」と言っつた。その言葉は、二重に折り重なつて、僕の中に流れ込んできた。

僕は戸惑つた。でも、僕以上に美冴は戸惑つていた。

やり場のない視線を、美冴は自分の足元に向けていた。僕は、どうしていいか分からずに、ただ「どうして、謝るの？」と声を出していた。

「手紙、私の方から一方的に」

美冴はその先を言葉にはしなかった。僕は、引き継ぐように言葉を発した。

「謝ることないよ」

（ごめんなさい……）

「私、藤堂君を傷つけてしまったんじゃないかって」

「そんなことないよ。確かに、ぜんぜん気にしてないって言えば嘘になるけど、そのことは僕の中ではもう解決してることなんだ」

美冴は、俯けていた視線を、そつと僕の顔へとなぞつた。

「ただ、何か本多さんに辛いことがあつたんじゃないかって」

そのことが心配だつたんだ、なんて恥ずかしくて口に出すことは

できなかった。でも、美冴は途切れた言葉の先を手繰り寄せて、僕の想いを汲み取ってくれていた。

「藤堂君」

（ごめんなさい……）

「ありがとう」

美冴の声は儚く響いて、子供たちの無邪気な叫び声にかき消された。僕はその儚さに胸を痛めながらも、そこに含まれた悲しみのすべてを汲み取ってあげることができなかった。

僕と美冴は並んで遊歩道を歩いていて、沈みかけた夕日の名残に溶け込んだ公園は、オレンジ色に染められていた。

やがて、公園の出口に差し掛かると、僕と美冴は行く先を見失ったように足を止めて、その場に佇んだ。メルシーは黙ってそんな僕たちを退屈そうに見上げていた。

まだ一緒にいたい、なんてことを口に出すには、僕たちはまだ共有した時間が少なすぎた。でも、ここで何もしなければ、もう二度と美冴と並んで遊歩道を歩くことはできないような気がしていた。

金縛りにあつたように動けないでいる僕の傍らで、美冴は俯けていた顔をそつと上げた。

「じゃあ私、こつちだから」

そう言つて、美冴は僕と反対方向の道へ足を踏み出した。

さようなら。

美冴がそう言つてしまう前に、僕は何かをしなければいけなかった。それなのに、息が詰まつて、僕の体は言うことを聞こうとしない。

美冴が僕の元から離れていく。

「さようなら」

一度立ち止まった美冴は、僕を振り返つて、言葉を発した。僕は「さようなら」と言葉を返した。

少しの間、美冴は僕を見つめていた。まるで、僕に何かを訴えるみたいに。

そして、美冴は僕から目を逸らして、僕とは反対の道へゆっくり足を踏み出した。

(引き止めて……)

その声は一筋の風のように僕の中をすっと通り過ぎていった。

（お願い……）

美冴が、僕の名前を呟いた。

僕は握っていたリールを手放した。メルシーが不思議そうに僕を見上げた。僕はしゃがみこんで、メルシーのお尻をポンと叩いた。

メルシーが全速力で走って、美冴の後を追っていく。短い鳴き声を聞いて、美冴は驚いたようにぱつと振り返ってから、向かってくるメルシーをしゃがんで抱き上げた。

美冴が僕の元へ戻ってくる。

困ったような、戸惑ったような、図りきれない微笑を僕に向けて。「学校が終わったら、大抵この公園を散歩してるから」

僕がそう言くと、美冴は、言葉にならない驚きを瞳に宿して、僕を見つめた。

「また、ここで会えるかな」

少しの沈黙の後、美冴は控えめに声を出した。

「私も、学校が終わったらいつもこの公園にいるから」

美冴の腕の中で、メルシーが短い鳴き声をあげた。

僕たちは、静かに微笑みあった。

そのときだけは、僕の中に流れ来る美冴の声は、悲しみから解放されていた。

母さんが入院している病室は六人部屋だった。母さんのベッドは部屋の一番奥に置かれている。他の五人の入院患者は、一様に明るくて、体のどこかに包帯やギプスをしている以外は、とても健康そうだった。そして、母さんもそのうちの一人で、僕は初めてこの病室を訪れた時、ここが果たして本当に病院の一室なのか疑わしく思った。

でも、それはただ思い込もうとしていただけなのかもしれない。

無意識に、そうであって欲しいと願いながら。

そこに充滿している健康さが、ひどく不自然であることを意識しながら。

ある種の予感を感じ取りながら、その日、僕はそのことに初めて気づいたのだった。

その日は、クラス委員の仕事が長引いて、学校を出たのはいつもより二時間も遅れてからだだった。家を経由せずに病院に直接向かって、面会時間にはぎりぎり間に合うかどうかだった。でも、どうせ諦めるならとりあえず行ってみてからにしようと思った僕は、バスに乗って、二つ隣の町にある病院へ向かった。

病院に着くと、面会時間までには後二十分ほど余裕があった。僕

は、母さんが入院している病棟に入って、母さんのいる六人部屋の病室の中の様子を外からのぞいた。

病室の中は、いつもと違って、薄い暗の中に沈んでいるように見えた。それは、入院患者にとっては時間がもたらす、ごく自然な情景でしかないのかもしれない。毎日通り過ぎている、日常の一部に過ぎないのかもしれない。でも、初めて薄い闇に覆われている病室を目の当たりにした僕には、それは異常な光景にしか見えなかった。白一色に統一された部屋の中が、影に侵食されて、沈んでいく。

そのとき、僕は初めてそこに潜む真実を垣間見た気がした。影の中に侵食されて、沈んでいく人たち。

そこにいる人間と、いない人間。

確かにそこには、見えない境界線が存在していた。

僕の目は、自然に母さんの姿を追いつめていた。でも、母さんのベッドの周りはカーテンに仕切られて、母さんの姿を見ることはできなかった。

そのとき、不意に僕の中に声が響いてきた。

(ごめん……)

それは、外から内に伝わってくるものとはまったく性質の異なったものだった。僕は、その声を聞いているのではなく、感じていた。

(ごめん……ごめんね……)

母さんは、何度も何度も繰り返し謝っていた。

父さんに、姉さんに、そして、僕に。

母さんは泣いていた。泣きながら、僕たちに謝罪していた。

僕は、カーテンの向こう側でかすかに揺れている人影をじっと見つめた。

これは、僕の感情なのか？ それとも、母さんの？

張り裂けそうな胸の痛みに、僕はどうにかなってしまいそうだった。辛くて、悲しくて、悔しくて、愛しい。言いようのない感情の奔流が、僕の心を飲み込んでいく。

僕は泣きなくなつた。今すぐ、カーテンの向こう側に駆け寄っていつて、母さんを力の限り抱きしめてあげたかった。このどうしようもない喪失感に流されそうな母さんの心を、少しでも救ってあげたかった。

でも、それを行動に移すだけの勇気を、僕はまだ持ち合わせてはいなかった。僕は怖かったんだ。そうすることで、変ってしまう何かが。

その何かは、今の僕が受け止めるにはあまりにも残酷で、重すぎるものだった。僕は「大丈夫だよ」と言って笑いかけてくれる母さんを、そんなときにも求めてしまうほど、どうしようもなく、子供だった。

確かな予感が、母さんの声を通して僕の中に根付いていく。

僕はそれを振り払うために、その場から逃げるように駆け出した。病院を出て、バス停を通り過ぎて、暗闇に沈んだ風景の中を僕はがむしゃらに走り続けた。

体全体にのしかかる苦しみに、心の痛みを紛らわせてしまいたかった。いつそ、息なんてできなくてもいい。この心の痛みを引き換えにできるなら、どんなことでも受け入れられる。

やがて、限界を通り越した僕の体は、意思とは関係なく走ることを止めて、僕はその場に倒れこんだ。

母さんの声は、もう響いてはこなかった。そして、初めて僕は大声をあげて、泣いた。

誰もいないのに、誰かの声を感じてしまう。そう言ったら、誰か信じてくれる人はいるだろうか。

突然、僕の心に入り込んできて、いつか、その声は消えてしまう。そのとき、僕は小さな子供のようにな声で泣きながら、その声が僕を介して、やがて消えていく意味を感じ取った。

それは、悔しいというより、辛かった。

辛いというより、悲しかった。

悲しいというより、切なかった。

切ないというより、愛しかった。

涙にしか託せない感情は、涙に溶け込んで流れていく。流れた涙は、喪失感となって染み込んでいく。喪失感、時間とともに薄らいでいく。

やがて、涙が枯れた頃、僕たちは大切なものを一つ失っていく。

美冴は、まるで読み終えた小説の物語を心の中で読み返すみたいに、しばらく目を閉じて顔を上げていた。美冴のひざの上ではメルシーが、くつろいだ眠りの中に身を投じている。

「ねえ」

美冴が目を開けて、僕のほうを見ていた。

「なに？」

「記憶つて、いつから思い出に変わるのかな」

僕は、美冴の言いたいことがよく分からずに、首を傾げてから「どうして？」と聞き返した。

「別に深い意味なんてないの。ただ、ふとそんなことを思ったから」

「そう？」

「うん」

それでも、僕を見る美冴の目は、僕に深い意味を求めているみたいだった。

「よく分からないけど」

断っておいて、僕は声を出す。

「誰かに自分の記憶を語って聞かせるとき、それは思い出に変わっていくんじゃないかな」

「それは、今の私たちみたいに？」

「うん。今の僕たちみたいに」

「じゃあ、それは幸せなこと？」

僕は少し考えるふりをしてから、声を出す。

「多分ね」

美冴が嬉しそうに、小さく笑って「よかった」と呟いた。

それから、僕たちはしばらく黙って、同じ方向を見つめた。そこには、広場の真ん中で、無邪気に走り回る子供たちの姿があった。

夕焼けに照らされる公園。広場のベンチ。隣に座る美冴。サッカ

ーボール。走り回る小学生。響いては消える、無邪気な掛け声。

すべてが媒体になって、僕を懐かしさの深みに優しく誘っていく。そして、僕たちはそこで、記憶を思い出へと変えていく。

「ねえ」

美冴が、横でそつと声を出した。

「いつか」

美冴は、子供たちに視線を向けたまま、しばらくその先を言葉に変えることをためらっていた。それから、結局美冴は「ううん、なんでもない」と言つて僕に照れくさそうに笑いかけてきた。

そのとき、美冴は言葉にできない思いを、そつと心の中で呟いていた。

（いつか この瞬間が思い出に変わる時が来ても、あなたは私の隣にいてくれますか？）

十五歳の女の子が言葉に変えることのできない、儚い想い。

僕は気恥ずかしさのあまり、美冴から目を逸らして、美冴のひざの上で眠るメルシーをつつき起こした。

僕につつき起こされたメルシーは、面倒くさそうに顔を上げて僕をにらみつけた。

「ガキか、お前は」

そう言われたような気がした。

やがて、メルシーは眠そうに大きなあくびを一つしてから、美冴のひざの上でまたまどろみだした。

美冴が僕を見て、おかしそうにクスツと笑った。

僕は、顔を赤くして美冴から目を逸らした。

無邪気な叫び声が、僕たちの横を通り過ぎていった。

公園が薄い闇に沈む頃、僕たちは広場を出て、遊歩道を並んで帰る。

ここで出会ってから一ヶ月、僕たちは毎日公園で待ち合わせて、毎日公園で別れた。

そして、今日も僕たちは公園で待ち合わせて、公園で別れる。

僕たちは、出会いにも別れにも続く遊歩道を歩いている。もちろん、メルシーも一緒に。

「ねえ」

美冴は自分のつま先を見つめて歩きながら、言った。

「不躰な質問をしてもいいかな」

僕は横を歩く美冴の横顔をのぞいた。それから、美冴の真似をして自分のつま先を見つめて歩く。

「なに？」

「お母さんのことは、藤堂君の中ではもう解決してるのかな」

僕はもう一度美冴の横顔をのぞいた。今度は美冴も僕の横顔をのぞいて、僕たちはほぼ同じタイミングで目を合わすこととなった。

「本当に、不躰な質問なんだけど」

美冴が、申し訳なさそうに声を落とす。僕は、美冴の質問の意味を予感しながら「大丈夫だよ」と言った。

「それはもう、僕の中では解決してることだから」

「そう」

そして、僕たちはそれから無言のまま公園の出口へたどり着いた。

「もしよかったら、聞かせて欲しいの」

さよならを言う前に、美冴は言った。

「いつか、そのときのことを」

「うん。じゃあ、そのときが来たら、話すよ」

「うん」

そのときがいつになるかは分からない。でも美冴は満足そうにうなずいて、僕に「さよなら」と言った。

僕も「さよなら」と言つて、メルシーも短く鳴き声を上げた。

僕たちは、手を振り合つて別れた。

帰り道、田んぼ道の真ん中で僕は足を止める。

（藤堂君……）

僕は目をつぶって、その声の響きに聞き入る。

僕と別れるとき、美冴は家路を辿りながら、いつも今日あった出来事を振り返る。

学校であったこと、印象に残ったこと、友達との会話。そして、僕との時間。

美冴は、丁寧に僕の言葉の一つ一つを手繰り寄せて、大切にそれを胸の中に閉まっていた。何気ない僕の仕草一つ一つが、美冴の心を満たしていく。

（藤堂君……）

届かないことを知りながら、心の中だけで僕を呼びかける美冴の声を、美冴の知らないところで僕は聞いている。

この幸福感は美冴のものであって、僕のものでもあった。

しばらく、僕は目を閉じたまま美冴の声を聞いていた。そして、それは満たされた心の隙間を縫うように、唐突に美冴の心に入り込む。

ずっと、静かに途切れる美冴の声。訪れる、一瞬の静寂。そして。

（ごめんなさい……）

暗闇の中に響く、今にも消え入りそうなほど儚い美冴の声。

美冴の心に、言い知れない悲痛な何かがじわり、じわりと染み込んでいく。

僕は、思わず自分の胸に手を当てた。多分、今美冴もそうして、心の痛みに耐えているような気がした。

（ごめんなさい……ごめんなさい……ごめん……ごめんね……）

誰に向けてのものか分からない罪悪感を抱えて、美冴は何度も誰かに謝り続ける。何度も。何度も。

美冴は、幸福感に包まれながら、罪悪感にもとらわれていた。異なる二つの感情は、折り重なりながら美冴の心を捉えて放さない。

僕は感じていた。

その二つの感情の原因が僕であることを。

美冴は、僕といることを望んでくれている。でも、そうすることで美冴は目には見えない罪悪感に苛まれる。その罪悪感は、拭い去るには大きすぎて、捨ててしまうには美冴に浸透しすぎていた。

やがて、その罪悪感が過ぎ去ると、美冴の心は空っぽになる。

そのとき、僕は美冴が涙を流していることを知る。

その感覚は、悔しいというより辛かった。辛いというより悲しかった。悲しいというより切なかった。切ないというより愛しかった。いつかに似た感情が、僕に喪失の予感を植え付けていく。僕は、胸に当てた手をぎゅっと握り締めて、その場に立ち尽くすことしかできずにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7492a/>

君と僕の物語

2010年10月28日08時15分発行